

オンラインで行うチューター活動の困難点

—チューターおよび留学生を対象とした質問紙調査より—

北川幸子

【キーワード】 パンデミック、留学生、チューター、ボランティア、オンライン

1. はじめに

学部生や院生が留学生とペアになり、留学生の学習や生活をサポートするチューター制度は1972年に国立の高等教育機関において国費留学生を対象に発足し、その後、私費留学生にも適用されるようになった(横田・白土 2004)。チューターは留学生と同じ専攻分野で学ぶ先輩学生から選定されることが多く、渡日後の一年間あるいは二年間、留学生の修学・生活支援を行う。チューターに対しては、多くの場合、謝金が支払われる。昨今では、グループで活動を行うものや、ボランティアで行うもの、日本語教員養成課程の学生をチューターにすることで双方向での学びをねらったもの、一定の参加をすれば国際交流活動として大学独自の認定証を発行するものなど、目的や形態に変化や広がりが見られる。

神田外語大学留学生別科(以下、別科)では2005年より「チューター」という名称のチューター制度を運営してきた。別科で1～2学期間学ぶ留学生と学部生をペアにし、週に一度学内で会って交流活動を行わせるもので、報酬なしのボランティアによる活動として運営してきた。当初はチューターに日本語クラスの予復習の手伝いや、留学生が書いた作文のチェックなどをさせており、留学生の日本語学習を支援するという意味合いが強かったが、特別なトレーニングを受けさせていないチューターに、そのような役割を期待することに懸念もあった。

その後、別科で受け入れる留学生のレディネスやニーズが少しずつ変化し、留学生をとりまく別科の状況も変わってきた。変化のひとつには、学内の留学生を支援する施設や人的リソース、ネットワークの充実化が挙げられる。来日の際に空港へ出迎え、寮やアパートに入るまで付き添ってくれる学生ボランティアや、英語や様々な言語を話すことを目的として設置された学内施設に常駐する、主に外国籍の、英語やその他の言語の教員、ライティングセンター等の教員、日本語教員や別科の職員に加え、2018年からは英語で対応できるカウンセラーも配置されており、様々な場面やニーズに応じて頼れる存在がある。このような状況の中で、チューターに求められる役割も少しずつ変化してきたと思われる。

筆者は2016年に、このチューター制度の運營業務を担当することになり、活動目的と活動実態にずれが生じていたことから、全体の見直しを行うことにした。見直しの際、別科の教職員で確認、共有したプログラムの目的は、1) 留学生が授業で学んだ日本語を産出する機会を提供し、習得の促進をねらう、2) 生の日本語に触れて学ぶ機会を提供する、3) 学部生との交

流を通して文化を学ぶ機会を提供する、の3点である。

別科では産出を重視した「インターアクション」という科目が必修科目になっており、教室外でもなるべく日本語でコミュニケーションをしてほしいとの期待がある。日本に滞在している留学生は日本語と触れる機会に恵まれていると思われがちであるが、外国語大学で学ぶ学部生は英語等の学習言語を用いて留学生と交流したがる者も多く、キャンパス内では留学生の母語や英語で話す機会が多い。また、留学生同士の友人グループで行動している際には、グループの中の、日本語の運用能力が高い学生が会話をリードすることもあり、心理的な障壁から、特に初級レベルの留学生の日本語を話す機会が奪われてしまいがちである。このような背景から、留学生全員に学習中の言語を用いて話す機会、日本語話者と交流する機会を提供することを目的として、チューター制度を継続していくこととした。

プログラムの見直しに際し、「(日本語を)教える」という印象を与えかねない「チューター」という名称を廃止し、当時学生らがよく交流活動を行っていた「カエデラウンジ」にちなみ、「カエデメイトプログラム」に改称した。

2. 本稿の背景と目的

2020年度前期は新型コロナウイルスの感染が拡大した影響を受け、神田外語大学ではオンラインで授業を開講することになり、キャンパスへの入構が一定期間制限されることになった。別科に在籍する留学生らも、アパート等の自室からコンピュータなどを使って授業を受けることになった。

課外活動であるカエデメイトプログラムについて、実施すべきか否か検討がなされたが、日本に滞在していても自室にいるしかない留学生たちに、日本の学生たちと交流する機会をわずかでも提供し、交流活動が日本語学習のモチベーションにつながることを期待して、全面的にオンラインで実施することになった。プログラムのオンライン化にあたっては、業務を担当する別科の日本語教員2名(うち1名は筆者)で随時相談しながら、通常の手順に修正を加え、進めていった。

本稿の目的は、オンラインによるカエデメイトプログラムに参加したチューター(以下、カエデメイト)および留学生を対象に、質問紙調査を行い、カエデメイトや留学生がオンラインによる活動をどうとらえたのか、問題や困難点があったかなどについて明らかにし、次回全面的にオンラインあるいは部分的にオンラインなどの形式で実施する際の注意すべき点や改善点を探ることである。

3. 先行研究

チューターとそのチューティーである留学生との関係構築上の難しさや、活動上の困難点や問題点について扱った先行研究は多い。

チューターが大学に提出する報告書の分析から、彼らが活動をどのようにとらえ、どのような学びや気づきを得ているかを考察した田中・椎名(2019)では、チューターらが異文化理解の機会や言語への関心の高まりなど、活動を肯定的にとらえている一方で、指導における試行錯誤や悩みも有していることがわかり、教職員間の連携を高め、見守り体制を強化していく必要があるとしている。また、田中(1997)では、チューターを対象に質問紙調査を実施し、異

文化間教育の視点から、彼らが挙げた、やってよかったことや困難について考察している。任期中の困難点として挙げられた中でもっとも評定の高かったものは言葉の問題であったが、チューター自身の英語力の自己評価を見るとそれほど低くないことから、背景には英語に対する「苦手意識」があるのではないかと分析している。

チューターと留学生に質問紙調査を行った小林（2007）では、活動の困難点として時間を調整することの難しさや、専門に関する質問に答えられない・答えてもらえない点を挙げる回答が両者に共通してあったという。今後の課題として、チューターの役割の明確化や、チューター・ガイドブックの作成、チューターや留学生をとりまく教職員の連携等を挙げている。同じく、チューターと留学生に質問紙調査を行った田中（2003）では、「うまくつきあいにくい原因があるとしたらそれは何か」尋ねたところ、チューターは「自分の語学力不足」を強く意識しているが、留学生の側ではチューターの語学力不足がそれほど意識されておらず、「日本人側のソーシャルスキルと社会知識の不足」に帰属がもっとも高かったという。チューターと留学生の間で原因に関する認知にずれはあるものの、「交流が進まない原因は、より大きく日本人側にある」という点においては共通した認識が見られたという。

謝金のない、ボランティアによるチュータープログラムを扱った先行研究には、岡山大学における取組みを報告したものがある。チューターの役割の明確化を目的に留学生を対象に行われた質問紙調査では、活動において「日本語の指導」や「付き添い支援」「情報提供・交流」などが行われていることが明らかになり、留学生の9割近くが活動に満足している一方で、「チューターの忙しさ」や「チューターの英語力不足」、「人間関係の構築ができなかったこと的不满」などの否定的意見も見られたという（岡・坂野 2006）。その後、再度留学生を対象に行われた質問紙調査では、定期的なチュータリングを受けた留学生ほど活動への満足度が高いこと、チュータリングの内容項目が多ければ多いほど満足度が高いことが明らかになったとしている（宇塚・岡 2016）。

これらの実践と比較し、別科のカエデメイトプログラムがこれまで特に大きな問題がなく継続できてきた理由として、以下のようなプログラムの特徴および環境的要因が考えられる。

- 1) 外国語大学に在籍する学生は総じて異文化や言語に関心を持っており、留学生との間に共通性を見出しやすい
- 2) 本学で学ぶカエデメイトには、様々な授業や課外の活動で多様な背景をもつ教員や学生と交流した経験があり、多様な文化、言語に慣れている
- 3) 活動時に日本語使用を強制せず、英語や留学生の母語、その他媒介語の使用を認めている
- 4) カエデメイトに「教える」ことを求めていること、お互いに歩み寄りながら、コミュニケーションを行い、双方向的な働きかけで交流することを、両者に共通認識として持たせている

今回は全体での顔合わせ会が実施できなかったため、4) の認識がどこまで共有できていたかは不明であるが、留学生とチューターの期待が一致していないと問題になる場合があることは以前から指摘されており（横田・白土 2004）、実施形態が変わったとしても、確認しておくべき重要な点である。

4. 2020年度前期カエデメイトプログラムの実施手順と方法

今回の調査について報告を行う前に、2020年度前期のカエデメイトプログラムについて、その実施手順と方法、工夫した点を整理しておく。

全体のスケジュールは表1のとおりである。コロナウイルス感染拡大の影響を受け、授業開始が遅れたことで、カエデメイトプログラムの開始時期も通常より遅くなり、活動期間も通常より約1カ月短い、2カ月間となった。

急遽オンラインでの実施に切り替えて行ったことで、手順や形態を変更したものや、新たに追加したものは、表1中の2)、3)、5)、7)、8)である。

以下、手順ごとに詳しく述べる。

表1 2020年度前期カエデメイトプログラムのスケジュール

時期	作業やイベント等
1月	1) カエデメイトの募集
3月下旬	2) 先学期から継続して在籍する留学生に参加希望を再確認
4月上旬	3) カエデメイトの確定
4月上旬	4) カエデメイトと留学生のペアリング
4月中旬	5) カエデメイトおよび留学生に活動についての案内を配付
4月27日～	【活動開始】
5月下旬	6) 5月分の活動レポートの回収・フィードバック返却
6月5日, 9日	7) カエデメイト対象の個別相談会実施
6月18日, 22日	8) 複数ペアでの合同セッションイベント実施
6月下旬	9) 6月分の活動レポートの回収
	【活動終了】

1) カエデメイトの募集

カエデメイトプログラムに参加を希望する学部生の募集は、前の学期の終盤に行っている。キャンパス内の掲示板や、学内で使用している情報システム「Campus Web」等で日程を告知し、昼休みの時間を利用して説明会を二回、実施している。参加を希望する学生は、説明会に参加し、活動内容等を理解した上で応募する手続きとなっている（過去にプログラムに参加したことがある学生のみ説明会への参加を免除）。

説明会において強調している点は、カエデメイトには英語を含む語学能力を求めている点、日本語を教える必要はない点、Language Exchange ではない点である。また、それに加えて我々がどのような人にカエデメイトとして活躍してほしいと思っているかも伝えている。例えば、多様な背景をもつ留学生に偏見なく付き合える人や、人とのコミュニケーションの中でうまくいかないことがあったときに、ほかの言葉で言い換えたりなど、積極的に工夫できる人などである。学内には、カエデメイトプログラム以外にもチューター制度がいくつかあり、それらの中には語学力や留学経験などが求められるものもあるため、混乱のないよう丁寧に説明している。

2) 先学期から継続して在籍する留学生に参加希望を再確認

別科で学ぶ留学生は、一学期目には必ずカエデメイトプログラムに参加しなければならないが、一年在籍する学生の二学期目の参加については任意としている。二学期目になると、キャンパスやアルバイト先などで様々なコミュニティに属し、十分な日本語の使用機会が得られ、ある程度自立的に生活できている学生も少なくないからである。

二学期間在籍する留学生には、一学期目の終了時に希望調査をとり、次学期の参加希望者を把握しているが、2020 年前期は急遽オンラインで実施することに決まったため、あらためて SNS やビデオ通話を用いた交流になる旨を伝え、それでも参加を希望するかどうか、Google form⁽¹⁾を用いて調査した。参加を希望していた 17 名のうち、1 名のみオンラインで実施するなら参加をしないと回答したため、2020 年度前期にカエデメイトプログラムに参加をする留学生は新入生 13 名、継続生 16 名の計 29 名となった。

3) カエデメイトの確定

カエデメイトプログラムに参加を希望する学部生が必要人数を超える場合には、抽選を行っている。2020 年度前期は、抽選後、候補者となった 29 名に再度連絡し、オンラインでの実施になる旨を伝え、Google form 上で参加か辞退かを回答してもらった。全員から参加を希望するとの回答が得られ、プログラムに参加するカエデメイト 29 名を確定することができた。

4) カエデメイトと留学生のペアリング

カエデメイトと留学生のペアリングは、業務担当の日本語教員が行っている。日本語の学習経験のない留学生や、社会経験豊富な、年齢の高い留学生など、留学生のプロフィールによって教員の判断で恣意的にペアを考えることもあるが、ほとんどの場合は無作為に組み合わせている。カエデメイト、あるいは留学生が活動の途中にペアの解消や変更を要望してくることもあるが、関係が破綻するほどでないかぎり、双方が歩み寄り、働きかけることで関係を構築していくように指導し、必要があれば教員が介入し、支援するなどしている。

5) カエデメイトおよび留学生に活動についての案内を配付

通常は、カエデメイトと留学生の両者が参加をする顔合わせ会を学内施設において実施し、活動についての案内やアイスブレイクなどの活動を行っている。学生らは、顔合わせ会で初めてペアになる相手と会うことになるが、他のカエデメイトや留学生とグループで話したり、ペアでビンゴゲームに参加したりなどするなかで、初対面の緊張をほぐし、スムーズな交流のスタートがきれるよう工夫して行っているものである。プログラムに参加するにあたり、注意してほしい点を、両者が参加する場で説明することによって、共通の理解、認識ができることも、顔合わせ会を実施する大きな利点であった。また、会の最後には各ペアで自己紹介をしたり、次回以降会う曜日や時限を話し合ったりする時間があるが、その際に別科の教員が交流の様子を見てまわり、担任クラスの留学生に声をかけたり、カエデメイトに助言をしたりなどする機会にもなっていた。

今回はキャンパスへの入構が制限されていたため、顔合わせ会を実施することはできなかった。カエデメイトへは文書 (PDF) を E メールで送付し、留学生には Zoom⁽²⁾を用いてオンライ

ンで行うクラスごとのガイダンスで文書（PDF）を配付し、各クラスの担任から案内をした。活動期間や活動方法といった基本的な情報に加え、以下の点についても説明を加えた。

- ・活動の目的は留学生が日本語のクラスで学んだことをアウトプットする時間を増やすこととお互いの文化に触れて学ぶ機会をもつこと
- ・一週間に一回、一時間程度、主に日本語を使って会話をする事
(カエデメイトは「先生」や「チューター」ではないため、あくまで交流を楽しむ)
- ・新型コロナウイルスの感染拡大をふせぐため、今回は直接会って対面で交流を行うことはせず、チャットやビデオ通話機能を用いてオンラインで交流を行うこと

6) 5月分の活動レポートの回収・フィードバック返却

活動が問題なく継続して行われているか、なにか問題が起こっていないかを把握するために、毎月月末に簡単な活動報告を Google form を用いてカエデメイトに提出させている。レポートに記述する項目は資料1のとおりである。レポートに書く内容は、ペアの留学生と相談して書いてもよいことになっている。

今回はオンラインで活動を実施することになったため、初回にあたる5月のレポートには、活動に使用しているツールや使用環境等について問う質問を追加した。

レポートの回収後、別科の専任教員が閲覧できるよう共有し、各レベルの担任がレポートに目を通し、対応が必要な状況などが起こっていないか確認するようにしている。また、各担任からカエデメイトへフィードバックを返せるようにしており、活動内容についてのヒントや留学生の様子などについてコメントする教員が多い。

7) カエデメイト対象の個別相談会実施

これまで対面で実施していたときには、カエデメイトが業務を担当する教員に E メールや、あるいは直接オフィスを訪問し、相談をしてくることがあった。例えば、性的少数者である留学生にどのように接すればよいかや、会話が続かない場合はどうすればよいかなど、交流について相談するものもあれば、留学生と連絡がとれない、あるいはお金に困っているようなどと留学生の様子を心配するものなど、様々であった。

今回はキャンパスに入構することができず、物理的にオフィスに来ることができないことに加え、顔合わせ会等で担当教員と顔を合わせる機会もなく、心理的にも相談をしにくい状況があるのではないかと懸念されたため、業務担当の教員で相談をし、カエデメイト対象のオンライン相談会を企画、実施した。90分の個別相談会を二回実施し、指定の時間内に自由に Zoom にアクセスし、担当教員に直接相談できる機会を設けた。今回、相談会に参加をしたカエデメイトは1名であったが、学生側から相談しやすい状況を設定できたことは意味があったと思われる。

8) 複数ペアでの合同セッションイベント実施

ペアによっては学期途中になかだるみしてしまうことがあるため、複数のペアが合同で交流を行うイベントをこれまでも実施してきた。今回も希望するペアを対象に、Zoom を用いてオ

ンラインで合同セッションイベントを行った。1回目のセッションには5組、2回目のセッションには2組が参加し、活発な交流が行われた。

9) 6月分の活動レポートの回収

6月末にも5月末と同様に、活動レポートを提出してもらった。ただし、6月末でプログラムが終了となるため、担任からのフィードバックは返さず、業務担当の教員から、活動期間終了の連絡と参加へのお礼のみをEメールで送信した。

5. 調査方法

ここでは、今回実施した質問紙調査の方法について述べる。1) カエデメイト対象の質問紙調査および、2) 留学生対象の質問紙調査の概要は以下のとおりである。各質問紙の質問項目(資料2および3)は、参加前に不安を感じたかどうか、活動中になにか困難があったか、プログラムに参加をして満足しているかなど、共通のものを多く設定した。異なる質問項目としては、カエデメイトには次回への参加意欲をたずね、留学生にはプログラムが役に立ったかどうか、評価してもらった。1)の質問紙は日本語でのみ作成し、2)の質問紙は英語を併記して作成、日本語か英語で回答するよう依頼した。

1) カエデメイトを対象とした質問紙調査

時期：2020年7月14日～2020年7月28日まで

対象：2020年度前期のオンラインによるカエデメイトプログラムに参加した学部生

方法：Google form をメールで送信

有効回答数：21(参加者29名のうち、調査への協力を承諾した24名にGoogle form を送信)

調査内容：参加前に感じた不安とその変化、活動中に感じた困難、参加に対する満足度、次回への参加意欲

2) 留学生を対象とした質問紙調査

時期：2020年7月17日～2020年7月24日まで

対象：2020年度前期のオンラインによるカエデメイトプログラムに参加した留学生

方法：Google form をメールで送信

有効回答数：17(参加者29名のうち、調査への協力を承諾した24名にGoogle form を送信)

調査内容：参加前に感じた不安とその変化、活動中に感じた困難、参加に対する満足度、プログラムが役に立ったと思うか

6. 調査結果と考察

今回の調査では、無記名による回答としたため、年齢や学年、出身地等の属性によって考察することはできない。また、新型コロナウイルス感染拡大の影響を受け、留学を取りやめ、あるいは延期にした新生も多く、別科に在籍する留学生数が通常の三分の一程度と少なかったこともあり、調査協力者の人数が少なかったため、今回は計量的な分析は行わず、質的に考察することとする。

6-1 参加する前の不安

表2は「プログラムが始まる前に不安はありましたか。」という質問に対する回答である。カエデメイトの約7割、留学生の約半数が「はい」と回答した。

表2 「プログラムが始まる前に不安はありましたか。」に対する回答

	カエデメイト	留学生
「はい」	15名(約71%)	9名(約53%)
「いいえ」	6名(約29%)	8名(約47%)
計	21名	17名

※()内はそれぞれの回答者全体に占める割合

プログラムの開始前というのは、授業がすべてオンラインで行われることが決まり、なるべく人との接触や外出を自粛するよう推奨されていた時期であり、生活の変化に適応しなければならず、誰もが不安を感じていた時期でもあるが、学生らがカエデメイトプログラムに参加するにあたって感じていた不安というのは、どのようなものだったのであろうか。

不安を感じていたと回答したカエデメイト(15名/21名中)および留学生(9名/17名中)に、不安の内容について自由記述の形式で回答してもらったところ、カエデメイトと留学生とにやや異なる傾向が見られた。

まず、カエデメイトに目立ったものは、「話が続くかどうか」や「会ったことのない人と上手く会話を繋げられるか」など、会話がどうなるかについての不安である。約半数にあたる7名が挙げていた。次に同程度に多かったのが、「仲良くなれるか」「どの様に相手と友好的な関係を築けるか」などの人間関係構築に対する不安、そして「オンラインということにとっても不安がありました」「実際に会って話すことができないこと」「今回はオンラインでの交流でそのようなこと(ジェスチャーや写真を見せるなど[筆者注])が簡単にはできないので」など、オンラインで実施することに対する不安で、それぞれ5名が言及していた。また、「どのレベルの日本語を使うべきか分からなくて不安」などのように、使用する日本語のレベルをどのように、あるいはどの程度調整すればよいか不安だったという回答も4名に見られた。これらの回答から、カエデメイトの中には、初めて知り合うことになる留学生とよい人間関係を構築し、毎週のセッションで会話を続けていけるかどうか不安を感じていた者が多かったことがわかる。約半数が「話が続くかどうか」に対する不安を感じていたと回答したが、オンラインで実施することになったことで、さらに不安が増長した可能性も考えられる。昨今、「若者の電話離れ」ということがよく聞かれるが、オンラインで、一対一で会話を継続しなければならないということにプレッシャーを感じた可能性も考えられる。

次に、留学生側の不安の内容を見てみると、「Because I can't speak Japanese at all. (日本語がまったく話せないから[筆者訳])」「まだ日本語を上手に喋れないので」など、自分自身の日本語能力に関する回答がもっとも多く、不安があったと回答した9名のうち6名が言及していた。日本語学習者である留学生が、日本語母語話者と一対一で会話することになるため、留学生にとっては大きなプレッシャーになっていたと思われる。他には3名が「この人は本当に私と友達になりたいか」「どうやってカエデメイトと仲良くなるか」などといった、人間関係構築に

対する不安を挙げた。初めて会う人とよい関係が作れるかという不安は、カエデメイトと留学生に共通して見られた点である。オンラインで実施することに対する不安を挙げた留学生は1名のみで、「I always feel awkward when I have to talk with someone in video call because I don't know what to do, I don't know what to say and I can't express myself. (ビデオ通話をしなければならないとき、いつもどうしていいか、何を言ったらいいかわからなくなって、気まずくなり、うまく自分を表現できなくなるから [筆者訳])」という回答が見られた。過去の経験から、苦手意識を持っており、不安に感じたと思われる。しかしながら、留学生の間ではオンラインで実施することへの不安はあまり目立たず、自分自身の日本語能力に関する不安がもっとも目立った。

6-2 参加する前に感じた不安の参加後の変化

これまで経験したことがない未知のことに挑戦するとき、漠然とした不安を感じることは誰しもよくあることであるが、今回カエデメイトや留学生が感じた不安は、実際に大きな問題につながったのであろうか。

「活動開始後、その不安はどうなりましたか。」という質問に対して、参加前に不安があったと回答した15名のカエデメイトのうち、全員が活動開始後すぐに、あるいは数回を経て解消されたと回答している。また、「留学生のフレンドリーさや会話への意欲に助けられた」「留学生がとても優しく、困っていても助けてくれたので、不安が楽しみに変わった」「留学生がリードしてくれて不安がすぐに消えた」などの記述から、留学生からの働きかけが不安の解消につながっていたことが読み取れる。両者が相互に働きかける交流プログラムではあるが、カエデメイトらがホスト側である自分、母語話者である自分がリードしなければというプレッシャーを無意識のうちに感じていた可能性も考えられる。

同じ質問に対して留学生らは、2名が「まあまあ(解消された)」と回答し、残りの7名は活動開始後すぐに、あるいは数回を経て解消されたと回答している。カエデメイトも留学生も、活動開始後には不安が徐々に解消され、大きな問題にはつながらなかったことがわかった。

6-3 活動中に感じた困難点

活動を通して大変だったことがあったかどうかを聞いたところ、カエデメイトの約4割、留学生の約2割が「はい」と回答した。

表3 「活動を通して、大変だったことはありましたか。」に対する回答

	カエデメイト	留学生
「はい」	9名 (約43%)	3名 (約18%)
「いいえ」	12名 (約57%)	14名 (約82%)
計	21名	17名

※ () 内はそれぞれの回答者全体に占める割合

大変だったことがあったと答えたカエデメイト(9名/21名中)および留学生(3名/17名中)に、大変だったことの内容について質問したところ、カエデメイトと留学生とで異なった傾向が見られた。

カエデメイトの回答が目立ったのは、オンラインで実施したことにより生じた、インターネット接続上の問題や、アプリ等の操作の問題で、6名が言及していた。それ以外では、留学生からの日本語学習や日本文化に関する質問や要望にどう対処すればよいか困ったという回答が2名からあった。また、1名からは「オンライン授業で課題が多い中、活動をしなければならなかった」という、学業との両立の難しさについて言及する回答もあった。

留学生の回答を見ると、1名のみが音声の聞きとりづらさという、オンラインで実施したことによって生じた問題を挙げ、その他は話す話題に困ったという回答が1名、活動時間以外の誘いに相手が来てくれなかったという回答が1名からあった。

6-4 参加満足度

今回、オンラインによるカエデメイトプログラムに参加をしたことに対して、どの程度満足をしているか、両者に質問した。結果は次の表4のとおりである。

表4 「今回、カエデメイトプログラムに参加をして、満足していますか。」に対する回答

	カエデメイト	留学生
「とても満足」	16名 (約76%)	9名 (約53%)
「満足」	5名 (約24%)	6名 (約35%)
「どちらでもない」	0名	2名 (約12%)
「不満」	0名	0名
「とても不満」	0名	0名
計	21名	17名

※ () 内はそれぞれの回答者全体に占める割合

カエデメイトの約8割が「とても満足」、2割が「満足」と回答しており、全員が今回プログラムに参加したことに満足していることがわかる。留学生のほうは2名が「どちらでもない」と答えてはいるが、残りの9割近くが「とても満足」、「満足」と答えており、今回、オンラインでの実施に切り替えてプログラムを運営したことには、一定の成果があったと言える。

対面で実施していたときにも同程度の満足度の高さが得られていたかを確認することができないため、今回の満足度の高さをオンラインでの実施によるものか、もともとのプログラムの内容や運営方法等によるものかを判断することはできない。オンラインでの実施が、本来対面でやるべきものの代替的な措置という認識をすれば、評価や満足度は下がってしまうのかもしれないが、反対に、これまでのキャンパスに通学する形の学生生活であれば、カエデメイトはアルバイトやサークル活動等で忙しい者が多かったと推察され、留学生にしても、アルバイトや友だちとのつきあい、観光など、日本語や日本文化と接する機会はずっと多くあったはずである。むしろ制約の多いパンデミック下の生活の中で人と知り合い、交流し、関係を構築していく過程が、今回に限ってさらに価値のあるものとなっていた可能性もある。

カエデメイトは在学中、何度でも応募をして参加することができるため、「次に機会があれば、もう一度カエデメイトプログラムに参加したいですか。」という質問をした。選択肢は「はい、対面（キャンパスで活動）、オンライン（ネット上で活動）に関わらず、参加したいです。」「対

面なら参加したいです。」「オンラインなら、参加したいです。」「いいえ、対面でもオンラインでも、参加したくないです。」の4択とした。全体の9割に近い18名が対面、オンラインに関わらず参加したいと回答し、この回答からも、カエデメイトの今回の満足度の高さがうかがえる。残りの3名は対面での実施なら参加したいと回答した。参加したくないと回答したカエデメイトはいなかった。

対面なら参加したいと回答した3名の、他の質問項目に対する回答を見ると、2名は交流の際、音声に問題があったことを報告しており、そのうちの1名はオンライン授業との両立が難しかったとも回答しているものの、3名ともが今回の参加を「とても満足」と回答しており、今回オンラインで行った活動をすべて否定的に評価しているわけではないことがうかがえる。

6-5 留学生が考えるカエデメイトプログラムの意義

留学生にのみ、カエデメイトプログラムが役に立ったと思うか聞いてみたところ、1名を除く16名が役に立ったと回答した。「いいえ」と回答した留学生は、カエデメイトプログラムが終わってから相手と連絡がとれなくなったことや、カエデメイトの活動時間以外で相手が誘いにくれなかったことなどを他の質問で回答しており、プログラムの趣旨やカエデメイトの役割を適切に理解していなかった可能性がある。

「どのような点で役に立ちましたか。具体的（ぐたいてき）に書いてください。」という質問に対しては様々な回答があった。回答の記述から、抽象化できるものを抽出し、大小のカテゴリーに整理したものが表5である。

やはりもっとも多いのが、日本語の学習に役立ったというコメントである。会話やリスニングの能力の伸びにつながったというものが多かったが、語彙や文法の面で伸びたという回答もあった。また、会話練習のよい機会になっていたという回答も5名からあり、本プログラムのねらいどおり、日本語を使う機会になっていたことがわかる。また、もうひとつのねらいである、日本文化、若者文化を学ぶ機会にもなっていたことがわかる。

また、副次的な産物として、カエデメイトプログラムの役に立った点を「新しい友人の獲得」とした留学生もいた。ただ「楽しい」ということを挙げている者も3名おり、言語や文化を学ぶ上でのメリット以外に、留学生生活を充実させる側面もあったことがわかる。

表5 留学生はカエデメイトプログラムがどのような点で役に立ったと考えているか

役に立った点		言及した人数 (/16名中)	回答にあった記述の例
大カテゴリー	小カテゴリー		
日本語学習	日本語能力の伸び	9名	「会話やリスニングの能力が伸びたと思います」「文法やよく使う言葉をどんどん上手になりました」
	練習の機会	5名	「話すチャンスがあります」「In my Interaction Class I feel less nervous talking in my PA session (「インターアクション」の授業のPAで話すとき、あまり緊張しないですんだ)」「Kaedemate is like the best output to practice daily conversation (カエデメイトは日常会話を練習するのにとてもいいアウトプットの機会)」「日常会話を練習するために役に立ちました」
日本文化・日本事情	新しい知識の獲得	8名	「カエデメイトを通じて家族の関係のような若者の考え方を知ります」「異文化交流をした上でより日本のことをよく理解することができた」「日本の入試や恋愛事情や家庭関係などについてもさらに分かるようになりました」
交流	新しい友人の獲得	4名	「We have become friends. I am very grateful for this program (友達になれて、このプログラムに感謝している)」「making new friend (新しい友達を作れたこと)」
	楽しい経験	3名	「The Kaedemate program makes the semester more enjoyable in general (カエデメイトプログラムに参加したことでこの学期がさらに楽しいものになった)」「日本の学生と話し合うことができ楽しかったです」「面白いことや困ることなど一緒にシェアしたりするのは快くていい感じですよ」

※表中の英語による回答には()に筆者訳を付した。

7. まとめと今後の課題

2020年は新型コロナウイルスの感染拡大を受け、全世界で様々な制限や修正が求められた。教育現場も例外ではなく、本学でも前期はすべての授業をオンラインで行うことになった。別科で受け入れをした留学生らは、憧れの国への留学を果たしたにも関わらず、キャンパスに行くことすらできず、それぞれの自室で留学生活を送ることになった。

別科では、これまで継続的にカエデメイトプログラムを実施してきたが、2020年度前期は初めてオンラインで実施することになり、29ペアの学生が参加をした。本稿では、オンラインによるカエデメイトプログラムに参加をしたカエデメイトおよび留学生を対象に行った質問紙調査の結果から、彼らがどのような不安を感じ、どのように対処していたか、どの程度満足していたのかを考察した。

カエデメイトには、会話が続くかという不安や、仲良くなれるかという人間関係構築に対する不安が目立ち、留学生では、自分自身の日本語能力に不安を感じたと回答した者がもっとも多かった。オンラインで活動を行うことに対する不安を挙げた回答者は、カエデメイト、留学生共に多くなく、活動の妨げになっていたような例は今回の調査では見られなかった。

一方で、活動中の苦勞に関しては、カエデメイトからは、インターネットの接続の不安定さや、音声の聞こえづらさなど、オンラインで活動を行ったことに起因するものが多く挙げられた。しかしながら、今回参加をした上での満足度を問う質問に対しては、カエデメイトでは全員が、留学生では9割近くが「とても満足」あるいは「満足」と回答しており、多少の大変さはあったものの、今回の経験を肯定的にとらえていることがわかった。

今回の調査結果の考察から、今後、オンラインでカエデメイトプログラムを実施する際の改善策として、以下を提案したい。

- 1) Zoom等を用いて、教員、カエデメイト、留学生が参加する、「オンライン顔合わせ会」を実施する。
- 2) オンラインで使える活動のヒント集を作成し、配付する。

1)の点に関しては、日本語教員の手助けがある中で、自己紹介やアイスブレイクなどの活動ができると、留学生らの初回の不安が多少払拭できるかもしれない。また、今回の回答に、カエデメイトの責任範囲や役割を適切に理解していないと思われるものが一部見られたが、全員が揃う中で、プログラムの目的や趣旨、注意点などを確認することで、共通の認識や合意が得られることも期待できる。2)に関しては、実際に今回の活動で、家の周辺の風景をビデオ通話で見せながら紹介した例や、画面共有でウェブサイトと一緒に見ながら会話を楽しんだ例などが活動レポートに報告されており、学生らのアイデアを共有する形にすることも一案である。一部、困難点として挙げられたインターネット環境については、突然起こったパンデミックによって急速にインターネットの需要が高まったことなど、今回に限られる事情によるところが大きいと思われるが、問題が起こったときに相談できる窓口を確保し、案内しておくことも検討したい。

授業や課外活動のオンラインへの移行は、一時的なものとして終わりを迎えるのか、あるいは今後「ニューノーマル」として部分的に定着することになるのかは、現時点では不明である。

しかしながら、今回の試みが無駄にすることなく、あらゆる可能性を視野に入れながら、今後に向けた内省と修正、開発を続けていくべきであろう。カエデメイトプログラムはボランティアで活動に参加してくれる学部生によって支えられてきたが、言語や文化に関心の高い外国語大学の学生にとっては、日本にいながらにして多言語、多文化に触れることができる貴重な機会であり、毎回の募集には定員の3倍近くの応募がある。活動を通して生きた言語や異文化コミュニケーション、人間関係構築のソーシャルスキルなどを学び、成長することができるのは留学生もカエデメイトも同じであり、支えるホストと支えられるゲストという関係性ではなく、互恵的な関係性が築けており、これまで双方から肯定的な評価を得てきた。今後も質問紙調査やインタビュー調査等を重ね、検証と改善を重ねながら、継続していきたい。

注

- (1) アメリカの Google LLC 社が提供する調査管理ソフトウェア。
- (2) アメリカの Zoom Video Communications 社が提供するコミュニケーションプラットフォーム。

参考文献

- (1) 宇塚万里子・岡益巳(2016)「ボランティアによるチュータリングの現状と課題ー留学生に対するアンケート調査結果を踏まえてー」『岡山大学全学教育・学生支援機構教育研究紀要』1、133-152
- (2) 岡益巳・坂野永理(2006)「ボランティアによる日本語研修生を対象としたチュータリングの現状と問題点」『留学生交流・指導研究』9、5-16
- (3) 小林浩明(2007)「チューター制度の改善と留学生アドバイザー」『北九州市立大学国際論集』5、53-62
- (4) 田中共子(1997)「日本人チューター学生の異文化接触体験(2):その役割と異文化交流に関する質問紙調査」『広島大学留学生センター紀要』7、84-108
- (5) 田中共子(2003)「日本人学生と留学生の対人関係形成の困難に関する原因認知の比較」『学生相談研究』24、41-51
- (6) 田中里奈・椎名渉子(2019)「留学生を対象としたチューター制度の現状と課題:フェリス女学院大学を例として」『フェリス女学院大学文学部紀要』54、61-78
- (7) 横田雅弘・白土悟(2004)『留学生アドバイザーー学習・生活・心理をいかに支援するか』ナカニシヤ出版

資料1

活動リポートの記入項目（1から23までは5月と6月で共通、24以降は5月のみ）

1. メールアドレス
2. 学籍番号
3. 名前
4. 留学生の学籍番号
5. 留学生の名前
6. 留学生の在籍クラス

7. 1回目セッションの日付
8. 1回目セッションの時間
9. 1回目セッションの内容
10. 2回目セッションの日付
11. 2回目セッションの時間
12. 2回目セッションの内容
13. 3回目セッションの日付
14. 3回目セッションの時間
15. 3回目セッションの内容
16. 4回目セッションの日付
17. 4回目セッションの時間
18. 4回目セッションの内容
19. 5回以上セッションした人は、こちらにセッションの日付・時間・内容を記入してください。
20. カエデメイトプログラムの今月の感想・気づいたこと（これは学部生の感想です）
21. カエデメイトプログラムの今月の感想や成果・来月の目標（これは留学生の感想です。留学生に聞いて、書いてください。）
22. 今月の活動の中で、問題などありましたか。問題があった人は、さしつかえなければご記入ください。
23. その他、質問や要望があればご記入ください。
24. 活動（交流）に使用しているツールは何ですか。
25. 毎回の交流は、どのように行っていますか。
26. 使用しているツールや使用環境等に何か問題がありますか。あれば、書いてください。
27. 今後、次のような企画があれば参加したいですか（実施するかどうかは現時点で未定です）。参加したいものがあれば、すべてチェックしてください。
カエデメイト対象の悩み相談会（zoom）・他のペアと合同で、グループで行う交流会（zoom）

資料2

カエデメイトを対象とした質問紙調査の質問項目

1. 今回、カエデメイトプログラムに参加をして、満足していますか。
とても満足・満足・どちらでもない・不満・とても不満
2. プログラムが始まる前に不安はありましたか。
はい・いいえ
3. どのような不安でしたか。具体的に書いてください。
4. 活動開始後、その不安はどうなりましたか。

5. 活動を通して、大変だったことはありましたか。
はい・いいえ
6. どのようなことが大変でしたか。具体的に書いてください。
7. 次に機会があれば、もう一度カエデメイトプログラムに参加したいですか。
はい、対面（キャンパスで活動）、オンライン（ネット上で活動）に関わらず、参加したいです。
対面なら参加したいです。
オンラインなら、参加したいです。
いいえ、対面でもオンラインでも、参加したくないです。

資料3

留学生を対象とした質問紙調査の質問項目

1. 今回、カエデメイトプログラムに参加をして、満足していますか。
After participating in the Kaede Mate program this term, were you satisfied with it?
とても満足 Very satisfied・満足 Satisfied・どちらでもない Not sure・不満 Unsatisfied
とても不満 Very unsatisfied
2. プログラムが始まる前に不安はありましたか。
Did you feel nervous before the program began?
はい Yes・いいえ No
3. どのような不安でしたか。具体的（ぐたいてき）に書いてください。
In what ways did you feel nervous? Please explain concretely.
4. 活動開始後、その不安はどうなりましたか。
For those of you who did feel nervous before the program started, how did you feel after it started?
5. カエデメイトプログラムは役に立ちましたか。
Was the Kaede Mate Program helpful to you?
はい Yes・いいえ No
6. どのような点で役に立ちましたか。具体的（ぐたいてき）に書いてください。
In what ways was the program helpful? Please explain concretely. (Please provide concrete examples.)
7. 活動を通して、大変だったことはありましたか。
Did you have any problems/difficulties while participating in the program?
はい Yes・いいえ No

8. どのようなことが大変でしたか。具体的に書いてください。

In what ways was the program difficult? Please explain concretely.